保育の当事者研究から応援ミーティングへ

From *Tojisha-Kenkyu* to *Ouen Meetings*：A Supportive Approach in Childcare

西川友理　南部紀子　迫共

Yuri NISHIKAWA　Noriko NANBU　Tomoya SAKO

大阪キリスト教短期大学　かわさき保育園　くらしき作陽大学

Osaka Christian College　Kawasaki childcare Center　Kurashiki Sakuyo University

Key words: 当事者研究、応援ミーティング、保育

目的

報告者らはこれまで「保育の当事者研究を目指す会」として毎月一回の研究会を実施してきた。対人援助学会第十五回広島大会では「保育関係者による当事者研究―保育現場の『しんどさ』等をめぐって―」と題するシンポジウムを行い、保育現場と保育者養成校教員の立場から検討を行った。

保育現場での対話の重要性は共有されてきているが、「弱い自分をあらわにすることへの抵抗」など、保育者自身の生々しい語りを排除する職場文化が、保育現場での当事者研究の広がりを阻んでいることが示唆された。

そこで報告者の一名が関係をもつ保育園では、応援ミーティングという形式で、当事者研究における困り事の共有と検討の共同を取り入れた職員会議を行ったところ、継続的な実施につなげられた。本研究では応援ミーティングの実践上の意義ならびに、応援ミーティングの成立と継続を可能にした要因を検討する。

方法

応援ミーティングは当事者研究と類縁的な対話手法であり、浦川べてるの家で、当事者研究の実践から派生したものだが、明確な定義づけはなされていない。向谷地（2019）は1995年のドキュメンタリー映画「ベリー・オーディナリー・ピープル」にその源流が見られるとし、「応援ミーティングの『応援』のイメージはチアガールのチアであり、『お祭り』に近い」と説明する。

保育現場での問題事例の検討は、しばしば原因の特定や問題の解決を志向する傾向があり、保育者の言動や態度を問題の原因と扱い、それらを正すことを求める場合がある。それは保育実践の改善に向かうものではあるが、一方で個人責任の追及が不安感につながることもあり、自己開示を妨げるものとなってきた。

報告者らは「当事者研究」が普及しにくい背景をこの追及や正す姿勢にあるのではないかと考え、むしろ保育現場において日々生起する問題状況そのものを「お祭り」と扱い、問題の生起を「応援」すなわち否定的に捉えず、検討の契機とすることで、保育者が自他を追及し正す姿勢から距離を取り、問題そのものと共存する可能性を示すことができると考えた。本研究では、A保育園で実施された2つの応援ミーティング事例について考察することで、応援ミーティングの実践上の意義について、また、なぜ当事者研究ではなく応援ミーティングが保育現場で一定の定着を見せたかについて、考察する。

事例

事例①）「保育者の『私たちの対立をどうするか』という関係から、『共にクラスの困り事を考える』関係へ」

当初B保育者とC保育者が、共に「相手が問題」と思っていたが、応援ミーティングを経ることでB・Cを含む関係する大人全員が、問題を属人化してとらえる視点から互いに困り事を共同で眺める関係に変化した。

事例②）「4歳児・5歳児が一緒に食事を終える方法」

昼食の際の「ごちそうさま」の手順が違う4歳児クラスと5歳児クラス。一緒に食事をすることになったが、この違いが問題になった。担任同士が話し合っても合意に至らなかったが、応援ミーティングにより「子どもに聞こう」という結論に至る。それぞれのクラスの子どもに意見を聞いたところ、子ども達から折衷案が出され、全員が納得できる方法で食事を終えることができた。

考察

当事者研究は自身の経験や困難を一人称で語る実践である。ところが保育者は、自身を主語にする語りをする機会が少ない反面、子どもを主語にして語る機会が多い。

応援ミーティングでは、保育者に自身の困難を直接語ることを求めるのではなく、子どもや保育場面についての語りを起点とすることで、自己開示に伴う心理的負担を軽減し、問題を共同で検討する機会を生み出している可能性が示唆された。

参考文献

向谷地生良（2019）「べてるな人々　第160回　応援ミーティング」一麦出版社

鯨岡峻（2016）「関係性の中で人は生きる」ミネルヴァ書房